

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 ヨハネの黙示録 3：1～6
2024年4月20日(土)

◆文脈と言葉

—創世記の天地創造の物語によってはじめられた聖書は、世界の終わりと、新しい天と地の出現を描く新約聖書唯一の預言の書とも言えるヨハネの黙示録で終わります。黙示という形をとった救済の歴史の完成のドラマがこのヨハネの黙示録なのです。黙示(録)と訳された元の語は「アポカリプス、啓示」という言葉です。世に対して隠されていた神の言葉と業が、覆いが取り除かれて明らかになるという意味です。明らかにされたという割には理解が難しいことばかりなので、暗に示されるという意味の「黙示」の方がしっくりくるかもしれません。しかし、この書物によって(も)神の真理が明らかにされているという聖書の神髄を忘れてはならないでしょう。

この書物はユダヤ教の伝統的な黙示文学(ダニエル書など)の特徴を継承しています。けれども、本書に特徴的なことは、天におられて支配を開始し、やがてこの世に再臨し、神に敵対するこの世の悪魔的勢力に勝利し、新しい天と地をもたらすのはイエス・キリストである、というキリスト理解に支えられている、という点です。

この預言書によって、迫害がますます厳しさを増しているこの時代、小アジアの諸教会に対して、すぐにも起こるであろう終末と完成を告げ、殉教の危機に直面している教会を激励します(迫害が厳しい時代には、終末の待望が強調される傾向が生まれます)。著者は、自分をヨハネと名乗る「見幻者」であり預言者です。用語、文体、背後の思想などから、ユダヤ人キリスト者と考えられ、小アジア地方の教会の指導者だったと思われます。2～3章は7つの教会に宛てた手紙の形をとっています。

各教会あての文章からは、各教会の状況を反映して賞賛や厳しい批判が述べられます。国家権力によるキリスト教への過酷な迫害下でも、信仰を保ち、忍耐と愛の業に励んでいる教会に対しては、賞賛と慰めと希望のことばを書き送ります。反対に、迫害に動揺し、生ぬるい妥協の信仰生活をしている教会には、悔改めと、正しい信仰を取り戻すようにと厳しい警告を発しています。

◆黙想のすじみち

(1)あらすじと説き明かし

—サルディスにある教会へは、厳しい言葉が告げられます。その行いは死んでいる、命の業ではない、というのです。その内容はわかりません。しかし、心からの礼拝なく、祈りなく、愛の業なく生活していたのかもしれませんが。

ひょっとすると表面上は活気のある教会に見えたかもしれないのです。それでもそこに、主に生きる命がない、そういうことが起こっていたのです。

—そこで、主は励まします。福音をどのように受け、どのように聞いたかを思い起こすように、と。それを守り抜き、悔い改めなさい。まだ、主の命にかえることができるのです。主が呼びかけてくださいます。「目を覚ませ」と。

—その中にも信仰を保っている人が認められました。その人達は終わりの日に勝利を得る人であり、その「名」は命の書から消されることはありません。裁きの日には、主が、命をあたえられる者としてその書から名前を呼んでくださいます。

(2)内容・意味:この箇所では語られていることの意味は何だと思えますか。神(父・子・聖霊)は何をなさり、何を語られているのでしょうか。

(3)語られる恵み。この箇所から自分に語られた恵みは何だと思えますか